

情報構造が導いてくれた 新たな英語の世界



西脇幸太

■ there 構文への疑問と解決

いわゆる there 構文の意味上の主語は、定の名詞句ではなく、不定の名詞句でなければならぬ、と高校で習いました。それまでは、「…がある」を表現するための便利で身近な形式として認識していただけに、意味上の主語に関わる新たな規則が加わって、there 構文が遠い存在になってしまったように感じました。と同時に、なぜそのような規則があるのだろうか、と、その理由に興味が湧きました。

その後、大学生になって手にした一冊のおかげで、新たな英語の世界が広がりました。安藤貞雄先生の『英語教師の文法研究』（大修館書店、1983年）です。there 構文の項を見てみると、それまでの限られた読書では出会うことのできなかった情報構造からの記述があり、大変興奮し、一気に丸ごと読み終えました（すぐに続編 [1985年：品切れ] も読み終えたのは言うまでもありません）。

there 構文に限らず、能動態と受動態、SVOO型とSVOA型 [筆者注：いわゆる5文型での第4文型と第3文型の違い]、句動詞の目的語の位置など、それまで、ひとまずバラバラに受け入れてきた事実、情報構造が一本の道筋を与えてくれました。there 構文がぐっと近寄ってきてくれたように感じました。そして、自ら情報を掴みにいくときにこそ、本当の刺激が得られるのだと痛感しました。そう考えると、there 構文へのアンテナが張られていたために、自分の方から there 構文に近寄っていくことができたのかもしれない。疑問が生じたときにすぐに解決できないものもある

と思います。しかし、アンテナを張っておくことで、感動的な出会いが待っているのだと思います。この体験は、現在取り組んでいる言語研究にも大いに影響を与えています。

■当時の自分へのアドバイス

一方、教授者からの支援も重要だと思っています。では、当時の自分にアドバイスできるなら、私は直ちに安藤（1983）を勧めるだろうか、と考えてみますと、少し慎重になります。大学生になって読んだからよかったかもしれないとも思うからです。すべてを与えてしまうのではなく、学習者が欲したときに手を差し伸べる、このタイミングや程度は、実に難しいと感じています。英語教育に携わって13年目になりますが、学習段階に応じた情報提供が重要だと痛感しています。入り口として最適であり、かつ、その先に繋がる情報がしっかりと準備されていて、必要に応じて提示できる、というものが理想だろうと思います。一つの成功例に『ジーニアス総合英語』（以下G総合英語）⇔『アクシスジーニアス英和辞典』（以下AG）⇔『ジーニアス英和辞典 第5版』（以下G5）の流れ（往来）が挙げられると思います。この流れには、入り口から自律への段階的な支援が、信頼できる一本の線に沿って具現化されています（無論、他の学習辞典・教材も効果的に組み込むことが可能です）。

■ G 総合英語での there 構文と、新・旧情報

there 構文について、G 総合英語（pp. 51-53）

では、まず基本の形と意味が提示され、文型に関心を持つ学習者への手当ても Question Box のコラムで適切になされています。そして、pp. 54-55 では「～が…にいる [ある]」の例として、次の2例が的確に挙げられています。

- (1) ① *There is a cat on the mat.*

(強調はママ、和訳は省略。以下同様)

- (2) ② *The cat is on the mat.*

続いて、「①の形は、名詞が聞き手の知らない「新情報」[...]である場合に使う」、「②の形では、名詞が聞き手の知っている「旧情報」である場合に使う」というそれぞれの存在意義が明示されています。参照先の p. 172 では、「新情報と旧情報」というコラムで、〈SVO₁O₂〉の文型・〈SVO〉の文型と能動態・受動態の存在意義が示されています。特に、態については、学習者に負荷のかかりすぎない長さの例文を用いながら、文脈まで考慮された記述があります。この他、pp. 152, 158, 594 でも情報の新旧に関する記述が盛り込まれています。

■ AG での there 構文

一方、AG (s.v. there) では、G 総合英語で扱われている内容に加え、**語法**欄には there 構文で使われる名詞に付く the や *There's two patients in the waiting room.* のように複数 (形) の語がきても単数で受ける場合など、さらに進んだ記述があります。具体的には、there 構文で使われる名詞に the が付く場合として、以下の(3)(4)を挙げています。

- (3) a) 新情報となる名詞が of 句や that 節などで限定されている場合：*There is the problem of race in America.*

- (4) b) 相手の気づいていない例をリストアップする場合。その時は「the + 名詞」だけでなく、固有名詞も可能：“What’s worth visiting there?” “Well, *there's* the park, the castle, and the museum.” [...] / “Who’s

going to help us?” “*There's* Bill and John.”

複数の語がきても単数で受ける場合については、(5)の記述があります。

- (5) 『くだけた』では複数の語がきてもしばしば単数で受ける。この場合、通例 *there's* の形となる：[...] *There's* a book, a notebook, and a ballpoint pen on the desk. [...] 《◆このように単数名詞を列挙する場合は *there's* がむしろふつう》。

■ G5での there 構文

G5 (s.v. there **語法**(5)) では、以下の2つが加わります。まず(6)タイプと(7)タイプの違いです。

- (6) Across the street *there* is a post office.

- (7) Across the street is a post office.

(6)は「存在を示す文であるが、*there* のない(7)は郵便局を指で示しながら「ごらんの通り」(As you can see, across the street is a post office.) という意になる」のように使用場面が適切に記述されています。次に「**語法**(7)「そこ」を表わす *there* との違い」についてです。

- (8) 次のような「そこ」という意味を表わす *there* との違いに注意 [...] : Come up. There is the ladder. [...] 《◆ The ladder is *there*. の倒置構文》。

とても読み応えのある語法記述です。

■再度、当時の自分へのアドバイス

以上のように、G 総合英語・AG・G5がそれぞれの役割を全うし、自律への支援をしてくれています。当時の私には、まず G 総合英語を差し出すのではないかと思います。そして、「この意味上の主語は the を伴っているのですが」「数の一致が」「類似表現との違いは」などと問いが展開したら、待っていましたとばかりに AG や G5 の記述を示すだろうと思います。きっと、一足早く新しい英語の世界を広げていたことでしょう。

(にしわき こうた・愛知文教大学専任講師)